

古墳時代の器物生産と倭王権
—埴輪、倭鏡、その他の副葬品の分析から—

加藤 一郎

序 章

古墳時代はその名称が示すように古墳とよばれるさまざまな形状や規模の墳墓が築造された時代である。古墳は支配者層のための墳墓であり、その築造を実現可能とする王権構造が存在していた。その王権構造や動態を解明することは古墳時代研究の大きな課題といえる。

この古墳を構成する各種の器物は、時期決定の手がかりであるとともに、被葬者や被葬者が属した集団と倭王権との関係を類推する手がかりであることは、先行研究をみてもあきらかである。

また、こうした各種器物の生産は、倭王権の厳密な管理下でおこなわれたものから、それほど管理されないものまで、さまざまな位相のあったことがしられている。したがって、それぞれの器物生産を分析することによってその位相に応じたさまざまな倭王権の動態を把握することが可能といえる。

そこで本論文では古墳を構成する器物やその生産を分析することによって、それを主導した倭王権の構造や動態をあきらかにすることを目的とした。

このような目的に関連する先行研究の検討から導かれる本論文のとるべき方法は、①単一の器物に立脚するのではなく、複数の器物の分析にもとづいて検討をおこなう必要があること、②古墳時代をつうじて生産されていた器物がのぞましいこと、③異なる原材料による器物を意図的に選択すべきであること、といえる。

これをうけて本論文では、埴輪と倭鏡を主たる分析対象とした。どちらも古墳時代をつうじて生産された器物で、その原材料は異なる。埴輪生産は土師器生産とも密接な関係があり、古墳時代における一般的な手工業生産を考える事例として良好な素材である。その一方で、倭鏡生産は倭王権直轄の生産拠点において限定的に生産される希少品であったといえる。

しかし、埴輪と倭鏡のみでは対極的すぎる可能性もあるので、それ以外の器物も対象とした。具体的には、古墳時代前期の器物として倭鏡と同じ青銅製品である銅鏃、古墳時代中期の器物として鏡にかわって副葬品の主役となった鉄製甲冑類などの武具類、古墳時代後期の器物として倭鏡と同様に青銅製品で鈴をもつことも共通する鈴釧について分析をおこなった。そして、これらの分析と検討を踏まえて、さらに総括的な考察をくわえることで筆者なりの古墳時代像を提示することとした。

なお、本論文をすすめる前提として、大別5期、細別10段階となる筆者による埴輪編年を構築し、時間軸を整理した。

第1部

第1部では倭王権中枢域における埴輪を取りあげた。

第1章では王墓を中心とした埴輪生産の実相にせまった。まず、I期古相において埴輪が誕生し、その後に引き継がれる多様な要素が発現したが、I期新相になるとその多様さが収斂され、埴輪生産も統一されはじめた印象をうける。

II期になると、組織的な製作者集団の編成が埴輪製作時にはやくもなされており、これが古墳時代を通じた埴輪生産の基調となるようである。

III期になると、同一製作者集団が複数の供給先に対して異なる段構成の円筒埴輪を意図的につくりわけるようになる。これは古墳に配置された円筒埴輪が倭王権における身分的・社会的序列を表示する役

割を付与されたことを示すものであろう。

Ⅳ期になると窖窯焼成技術が導入されるものの、それ以外の点で埴輪生産に大きな変更点はみられない。窖窯焼成の導入にもなって埴輪製作者集団の再編成がなされたことを想定する意見もあるが、現在確認できる埴輪生産からはそうした徴候を確認することはできない。なお、その生産組織は前段階であるⅢ期に比べてさらに統制のとれたものとなる。Ⅳ期古相段階がその想定される膨大な生産量にもかかわらず、もっとも均質で精美的な埴輪群が製作されていることから、埴輪生産の完成形と評価できる。しかし、Ⅳ期新相段階になると徐々に統制が弛緩していく状況もみてとれる。

Ⅴ期古相については不明な点が多いものの、中相においても依然として組織的な製作者集団の編成されていたことが確認されている。Ⅴ期古相は倭王権中枢域においても多様な系統が派生する時期でもある。Ⅴ期中相については、王墓と考えられる大阪府今城塚古墳における埴輪の様相が近年あきらかになりつつあり、この段階にいたってもⅣ期的な製作技法が多く残存することを観察できる。Ⅴ期新相は系譜的にみるとこれまで漸移的に変化してきた倭王権中枢域における埴輪の変遷のなかでもっとも大きな断絶が看取される。

続く第2章では、大型古墳とその陪塚における円筒埴輪の規格の推移について検討をくわえた。その結果、その規範は倭王の代替わりごとに変化しており、Ⅲ期からⅣ期にかけて倭王権が不安定であったことを指摘した。この時期はちょうど「倭の五王の時代」とも称され、一般的には安定的・発展的に成長をした段階と理解されがちであるが、そのような発展段階的な理解は誤りであることが指摘できる。

第2部

第2部では倭鏡生産について、前期倭鏡、中期倭鏡、後期倭鏡と区別して検討した。倭鏡は古墳時代開始期前後に列島にもたらされた中国鏡の影響をうけて生産が開始されたが、その時期は古墳時代初頭からそれほど時間を要さなかったと考えられる。

前期倭鏡は古段階、中段階、新段階に区分できるが、本論文ではこのうち中段階に位置づけられる対置式神獣鏡A系や、新段階に位置づけられる分離式神獣鏡系などについて分析をおこなった。その結果、前期倭鏡に通底する鬮龍鏡系の影響をみとめつつ、舶載斜縁神獣鏡の影響によってあらたな系列が中段階に生成し、それが中期倭鏡へとつながることを指摘した。したがって、「政権交替」といえるような倭王権の変化はみとめがたい。

続く中期倭鏡は倭鏡のなかでもっとも生産が縮小した段階である。中期倭鏡の生産は前期倭鏡から引き続きおこなわれていたと考えられ、その一部には前期倭鏡新段階の主要な系列である分離式神獣鏡系からの系譜がみとめられるものもある。また、その一方で魏晋鏡などの舶載鏡を模倣対象としてあらたな鏡種を創出する動きも確認できる。中期倭鏡では獣像鏡や神獣鏡といった半肉彫り表現の鏡が主体になるとともに、連作鏡として認識できるような近い関係性をもつ鏡群が多く確認できる。

縮小傾向にあった倭鏡生産を隆盛させる契機となったのは、同型鏡群の流入であった。後期倭鏡はこの段階の倭鏡であり、現状で500面程度が確認されている。ただし、同型鏡群の流入は倭鏡生産の活発化をうながしたものの、鏡の紋様という点ではあまり影響をあたえなかった。なお、後期倭鏡は倭王武の時代に生産が開始されたものといえる。

後期倭鏡段階になると、面径によって序列的、身分的な秩序を具現化する配付方法がふたたび隆盛したものの、数量の多寡については重要視されなかったため、前期倭鏡ほどの生産量とはならなかった。また、このような配付方法の復活とともに前期古墳鏡を模倣対象とすることによって鏡の紋様についても復古的な特徴が散見される。ただし、後期倭鏡生産は中期倭鏡から引き継がれたものが基盤にあり、面径の区分も中期倭鏡と後期倭鏡ではほとんど変わらない。しかし、中期倭鏡は連作鏡と認識できる鏡群は多いものの、同一紋様鏡の割合は前期倭鏡と同様に少ない。その一方で、後期倭鏡は同一紋様鏡の割合が非常に多い。これには同型鏡群の影響が考えられる。この後期倭鏡生産は、本論文における埴輪

編年のV期中相（TK10 型式段階）頃に終焉をむかえた。

古墳時代における鏡は倭王権が入手（生産）したのち、多くはすみやかに地域集団へと配付され、古墳へ副葬されたものと考えられる。しかし、一部には製作時期と副葬時期に大きな差がみられる。そうした事例について、どこで鏡の長期保有がなされたのかが問題となる。この点について従来は配付を受けた地域集団において長期保有のなされたことが実証されてきたが、その一方で筆者は倭王権における長期保有も存在したことを実証している。すなわち、鏡の長期保有は倭王権と地域集団のどちらでもありえたといえる。

とくに倭王権における長期保有を考えたばあい、前期古墳鏡が後期倭鏡の製作段階まで保有されていたことが確実であり、大きな政治的変動が倭王権に生じた様子を看取することは難しい。

第3部

第3部では倭鏡ではない副葬品を分析の対象とした。第1章では銅鏃を取りあげたが、具体的には奈良県衛門戸丸塚古墳出土の銅鏃の分析にもとづいて銅鏃生産を考究した。古墳時代の銅鏃には有稜系鉄鏃と弥生時代の銅鏃の二系譜があり、古墳時代の銅鏃生産には複数系統のあったことが指摘されている。弥生時代の銅鏃については、未製品の存在から「連鑄式」による鑄造方法が確実であり、古墳時代にも引き継がれていることが確認されている。しかし、無茎銅鏃や最終段階に位置づけられる有茎銅鏃の衛門戸丸塚古墳出土品などについては「単品鑄造」によって製作されたものとする。

このように古墳時代の器物生産においては、生産性や効率性といった現代的な視点だけでは説明がつかない製作方法の採用されていたことがある。古墳にともなう器物生産では「作る」という行為じたいにも意味があり、儀礼的な要素も含むものであったと考える。

また、銅鏃生産においては弥生時代とのつながりが確認できるものの、倭鏡については同じ青銅製品であるにもかかわらず弥生時代とのつながりは否定される。このことから、古墳時代開始期においては同じ原材料をもちいる器物生産においてもそのあり方は異なっていたことがわかる。

第2章では武器類を取りあげることとしたが、具体的には兵庫県茶すり山古墳からの出土品の分析にもとづいて古墳時代中期における器物生産を考究した。

まず革盾の検討から、その刺縫いという施紋方法は、合理的というにはほど遠い手法であり、その行為じたいに儀礼的な意味があったことを指摘した。また、その生産にあたっては原材料の確保が問題となるが、その候補としてクマの皮革を筆頭として考えられる点を指摘し、その点において岩手県中半入遺跡で確認されている皮革加工工房の存在が注目されることを指摘した。

続いて甲冑の検討からは、茶すり山古墳出土資料が甲冑研究における課題の一つである鋳留技法導入期の実態解明に有用であることを指摘した。甲冑では本論文における埴輪編年のⅢ～Ⅳ期にかかる時期に鋳留技法や鍍金技術などの朝鮮半島に由来する新技術が導入されており、茶すり山古墳出土品においても在来系甲冑に外来系甲冑の要素が採用されている。その具体的な様相として、在来系甲冑の生産組織と外来系甲冑の生産組織は相互に関連があり、互いの製品を確認しあえるような密接な存在形態として倭王権によって管理されていたことがうかがえる。

なお、帯金式甲冑の出土数が650組程度であるのに対して、前期古墳鏡の出土数は2000面を優に超える。鏡から甲冑へと主役の地位が交替したようにみえる要因には、中期倭鏡の生産量が前期倭鏡にくらべて大幅に減少したことによって甲冑の出土量が相対的に目立つようになっただけという背景がある。こうした実態にもとづけば、鏡から甲冑への変化を重視するのではなく、古墳時代前期から中期にかかる時期において古墳時代社会が質的・量的な格差づけを重視する傾向から質的な格差のみを重視する傾向へと徐々に移行していた点を評価すべきといえる。

ただし、古墳時代中期において甲冑の出土量が鏡よりも多いことは事実であり、その背景には倭王権の重視する品目の変更は事実といえる。最上位層に位置づけられる副葬品（ここでいう鏡や甲冑）の減

少については、古墳時代前期をつうじた鏡の授受によって、倭王権と諸地域とのあいだにおける信認関係の構築のすすんだことが背景にあったと考える。そして、鏡から甲冑への変化は、宗教的な宝器の象徴から軍事編成の象徴への変化を意味しており、精神的紐帯への依存から実体を重視する社会への変容をみてとれる。

第3章では鈴釧を、円環系鈴釧と貝輪系鈴釧にわけて分析をくわえた。その結果、鈴釧の製作時期は特殊な型式をのぞけば基本的にTK23～47型式段階に位置づけられることを指摘した。したがって、雄略朝の後に製作されなくなったということは、それを配付する必要がなくなったと考えるのがすなおであり、その分布は雄略朝の地域経営戦略を反映しているはずである。そして、それはおもに東日本の太平洋岸を中心として海上交通の要衝やそこから河川経由で内陸に入った地点に多く分布する。このことと、貝輪系鈴釧の釧本体の形状が南島産の貝輪に由来すること、円環系鈴釧の祖型が渡来系器物である有環付金属製釧であることなどを考慮すると、鈴釧は雄略朝における北方政策にかかわった「水界民」との強い関連を示す遺物といえる。

第4部

第4部では、第1～3部における検討結果を総括し、古墳時代における器物生産からみた倭王権の動態や古墳時代の社会がどのように変化していったのかという点について検討した。そして、その検討結果が古墳時代における国家形成においてどのように位置づけられるものであるのかを提示し、筆者の考える国家形成過程を提示することで本稿の総括とした。

まず、第1章では古墳時代の器物生産からうかがえる倭王権の動態について、画期となる時期とその根拠をまとめた。具体的には、①古墳時代開始期、②古墳時代前期後半、③古墳時代中期（初期須恵器段階）、④古墳時代後期前葉（TK23～47型式段階、雄略朝）、⑤古墳時代後期中葉（TK10型式段階頃、欽明朝）が画期となる。

①の画期では、倭鏡や銅鏃の検討でもあきらかなように、弥生時代からの断絶と継続という二つの側面がさまざまな局面でみられる。いずれにしても種々の要素は、倭王権によって一度取りこまれたうえで各地へ展開されるような状況であったと考えられる。また、卑弥呼が魏から「親魏倭王」の封号をあたえられたことから、その後に存続する王権構造の原形がすでに成立していたものと考えられる。すなわち、卑弥呼が「共立」されたという『三国志』魏書東夷伝倭人条における記述から、複数の有力な首長集団から王が共立されるような体制であったことがうかがえる。

②の画期は、鱗付円筒埴輪に代表されるような斉一的な埴輪群の成立が特筆される。この埴輪群の成立・展開と同調するかのように倭王権中枢の造墓域が奈良盆地東南部から奈良盆地北部へと移動しており、その背景に大和北部勢力の台頭を読みとる意見が多い。しかし、本論文における前期倭鏡の分析からは大きな変化や断絶はみとめられない。これは河内平野への造墓域の移動についても同様である。

当該期における倭王権中枢の構造は古墳時代開始期からそれほど変化のない状態であり、複数の有力な首長集団のなかから倭王が推挙される形式であったと推測される。代替わりに際してそれまでの規範の刷新がおこなわれた可能性は十分に考えられるが、現状では「政権交替」といえるような劇的な変化を想定することは困難といえる。

③の画期では、複数の素材にまたがった複合的な生産組織が倭王権中枢によって運営されるようになった。また、埴輪では倭王権による製作者集団への統制が徐々に強まっていく。

この時期における倭王権中枢の動向は、墓域の移動といった目にみえる大きな変化が確認できないことや、古墳の規模が巨大化していくことなどからも安定的に発展していたという理解がなされがちである。しかし、大型古墳とその陪塚における円筒埴輪の規格の推移をみると、その規範は代替わりごとに秩序なく刷新されており、当該期における倭王権は不安定な状況であった。「倭の五王」の朝貢は変動する東アジア情勢も含めて倭王権の不安定な様相を反映したものといえる。

なお、この時期における鏡から帯金式の鉄製甲冑へという副葬品の転換からは、精神的紐帯の生成・維持から「支配―奉仕」関係を重視する社会への変容をみてとれる。こうした変化の背景には、威信財システムによる統治からの脱却がよみとれる。

④の画期はTK23～47 型式段階に該当し、倭王武すなわち雄略朝に相当する。この時期になると埴輪ではいわゆるV群系の埴輪が出現する。このV群系の出現にあたって埴輪生産体制の再編成があり、部民制の成立をもとめる意見が考古学では多い。

しかし、第1部での同工品分析にもとづく通時的な検討が示すように、この時期に埴輪生産組織が劇的に変化した様子はみられず、埴輪そのものの型式学的な変遷からも漸移的な変化しか読みとれない。確かに、当該期においては「人制」と呼称される倭王権への服属・奉仕体制があったことはみとめられるが、それがただちに部民制の存在を意味するとはいえない。人制は部民制が成立する以前のものと考える。

またこの段階には、同型鏡群流入の影響によって後期倭鏡の成立したことが特筆される。後期倭鏡は中期倭鏡にくらべて生産量も増加し、量的な多寡が重視されない点をのぞけば、古墳時代前期における鏡と同様の配付方法であった。また、その紋様に前期古墳鏡からの復古的な模倣がみとれることもあきらかである。したがって、雄略朝では古墳時代前期を意識した規範の存在していたことがわかる。こうした様相は前段階では確認できないものであり、雄略朝の段階においても代替わりごとに秩序が刷新される状況に変化はなかったといえる。

雄略朝は器物生産の面からみるとV群系埴輪の成立や須恵器生産の全国的な波及、青銅製品の大量生産、復古的な要素の採用といった点に前後の時期とは顕著に異なる特徴を指摘できる。そうした拡大傾向をみせるいっぽうで、王墓の墳丘規模が縮小傾向をみせる点は注意される。

⑤の画期はTK10 型式段階頃で、欽明朝に該当する。倭王権中枢域における埴輪生産はこの段階になると大きな断絶をみせ、前段階からの系譜をもたない日置荘西町窯系の埴輪が展開する。これは古墳時代をつうじた埴輪生産のなかでもっとも大きな変化といえる。

また、倭鏡生産も同時期に終焉をむかえる。倭鏡生産とその配付は終焉をむかえるものの、それを副葬する時期は地域によって差があることを確認できる。具体的にいうと、配付後すみやかに副葬される地域が九州やのちの畿内周辺で確認できるのに対して、関東地方や中国地方では配付後も長期保有される傾向にある。そして、こうした鏡の副葬時期の地域的なちがいは、埴輪生産の終焉時期の地域的なちがいとおおむね同調する。

鏡副葬や埴輪生産が早い段階に終焉をむかえる地域は倭王権中枢に対して比較的忠実、あるいは依存度の高い地域であり、それらの終焉が遅い地域については倭王権中枢に対してある程度の独立性をもった地域といえる。

なお、倭鏡生産終焉後の鑄銅製品生産については、馬具類の生産が継続しつつ、あらたに装飾付大刀類の生産が勃興する。ここで鈴に注目してみると、双龍環頭大刀のなかで比較的古い段階に位置づけられる伝・茨城県舟塚古墳出土品の把頭に鈴が付属しており、この鈴には腹帯のあることが確認できる。腹帯をもつ鈴の出現については、おおむねMT85 型式段階とのことであり、時期的にも整合する。

装飾付大刀類の各形式と特定氏族との関連性はこれまでも指摘されているところである。また、氏姓制を人制の次の歴史的段階とし、部民制の成立との関連を指摘する意見もある。これらのことをあわせて評価すれば、この段階にみられる器物生産の変革は氏姓制や部民制の成立と関連することが指摘できる。古墳時代の器物生産から指摘できる倭王権のもっとも大きな変動は、⑤の画期といえる。

ここまで本論文では、器物やその生産といった具体像を把握してきたが、第2章ではその背景となる思想的な面にふれた。具体的には、日本列島への神僊思想流入の可否や、古墳築造後における古墳祭祀の状況から古墳時代の日本列島における祖先に対する意識を検討した。その結果、古墳時代の日本列島に神僊思想が定着していたとみることは難しいことを倭鏡の紋様などから示した。仮に中国大陸から神

僊思想が流入していたとしてもそれが定着していたとは考えられず、古墳時代の日本列島では中国大陸における神僊思想に似て非なる独自の世界観が形成されていたものと考えられる。

また、古墳時代の日本列島では祖先に対する意識が希薄であり、それが TK23～47 型式段階と TK10 型式段階頃に段階をおって変化したようである。こうした祖先に対する意識の変化は、人制の成立や氏姓制・部民制の成立などとも同調する可能性があり、倭王権による集団の把握や諸地域における集団の結合論理の変化をうかがわせる点で重要といえる。

このように本論文では、器物生産というハード面と思想や祖先観というソフト面の両方から、しかもそれを複数の器物において通時的、共時的に分析し、そこから古墳時代における倭王権の動態や社会像の構築をこころみた点に大きな意味がある。その成果についてはすでに示したとおりであるが、それが日本列島における国家形成研究のなかでどのように位置づけられ、評価できるのかという点について以下に示す。

結論からいうと、日本列島の広域を覆う国家が成立したのは古墳時代後期中葉頃と判断される。これは器物生産からとらえられる⑤の画期（TK10 型式段階頃、欽明朝）であり、祖先観に変化がみられる時期でもある。この時期における器物生産の変動は、倭王権への奉仕・貢納体制の変化を意味しており、部民制の施行にともなう倭王権による人身掌握の再編成をこの時期にもとめうる可能性が高い。

また、倭鏡生産の終焉は装飾付大刀などにその座をゆずったというよりも、古墳時代開始期から続く倭王権による器物授受の体系そのものが根本から変化した可能性が高い。装飾付大刀の生産・流通に特定の氏族が関与した可能性が高いとすれば、倭鏡や馬具といった鑄銅・金銅製品生産の再編成が上述した部民制の施行とともになされた蓋然性がさらに高まる。

また、国造制についても諸説あるが、6 世紀前半における東西の反乱を契機として成立した可能性が高い。こうした部民制や国造制にミヤケ制もともなうものと考えられており、やはり 6 世紀中葉頃の諸変革が律令体制へとつながる道を用意したものであることは想像に難くない。

このように欽明朝における器物生産の変化からは、律令体制へとつながるような諸制度の成立したことがうかがえる。ただし、そこへいたる変革は雄略朝から準備されたと筆者は考える。

なお、こうした変化は面的に同時進行したのではなく、「東日本と西日本」や「旧国単位」といった構図で類型化できるものでもない。実態としては、地域ごとにモザイク状でしかもそれぞれ異なる速度で進行したものと考えられる。